

横查情報月報



2014
3014
8月
8日

横浜市衛生研究所

平成26年8月号 目次

【トピックス】

横浜市における2013/2014シーズンのインフルエンザウイルス流行株の解析…………… 1

【感染症発生動向調査】

感染症発生動向調査委員会報告 平成26年7月 …………… 6

【情報提供】

衛生研究所WEBページ情報 …………… 10

横浜市における2013／2014シーズンの インフルエンザウイルス流行株の解析

- 横浜市における2013/2014シーズンのインフルエンザの流行は、山形系統のB型ウイルス(47.9%)、AH1pdm09ウイルス(29.1%)、ビクトリア系統のB型ウイルス(13.6%)、AH3型ウイルス(9.4%)の混合主流でした。15歳以下の年齢ではB型が、成人ではAH1pdm09ウイルスの占める割合が多くみられました。
- AH1pdm09ウイルスの抗原性状は、ワクチン株と類似していました。HA系統樹解析では、これまでのクレード7からクレード6に移行しました。入院サーベイランスではAH1pdm09ウイルスの割合が多く、肺炎や脳症等重症例が目立ちました。
- B型ウイルスの抗原性状は、山形系統・ビクトリア系統ともワクチン株やレファレンス株とほぼ同等でした。HA系統樹解析では、山形系統はクレード2とクレード3に、ビクトリア系統はクレード1Aに含まれました。NA系統樹解析では、山形系統とビクトリア系統のウイルスが交雑したリアソータント株が2株検出され、アミノ酸が1つ挿入されたビクトリア系統のウイルスが3株検出されました。
- AH3型ウイルスの抗原性状は、ワクチン株と類似していました。HA系統樹解析ではワクチン株と同じサブクレード3Cに含まれ、その中でもサブクレード3C.3が多数を占めました。
- 抗インフルエンザ薬感受性サーベイランスでは、AH1pdm09ウイルスで薬剤投与歴のある患者から耐性株(感受性株とのミックスを含む)が4株検出されましたが、耐性株による地域流行はみられませんでした。B型ウイルスでは、山形系統のウイルスでノイラミニダーゼ阻害薬4剤(タミフル、ラピアクタ、リレンザ、イナビル)に対し薬剤感受性が低下した株が5株検出されました。

【インフルエンザ様疾患の患者数】

2013年6月から2014年5月までにインフルエンザ定点(小児科92定点および内科60定点:計152定点)から報告されたインフルエンザ様疾患患者数は、定点あたり304人で昨シーズン同期の193人を上回り、過去10年では3番目の規模の流行でした。今シーズンは第51週(12月23日からの週)に流行の目安となる定点あたりの報告数1.0人を超え、第5週(2月3日からの週)に48.5人とピークとなりました。第7週(2月17日からの週)には26.9人まで減少しましたが、翌週は上昇に転じ3月第9週に30.7人となりました。その後、徐々に減少し5月第18週(5月5日からの週)に定点あたり1.0人を下回りました(図1)。

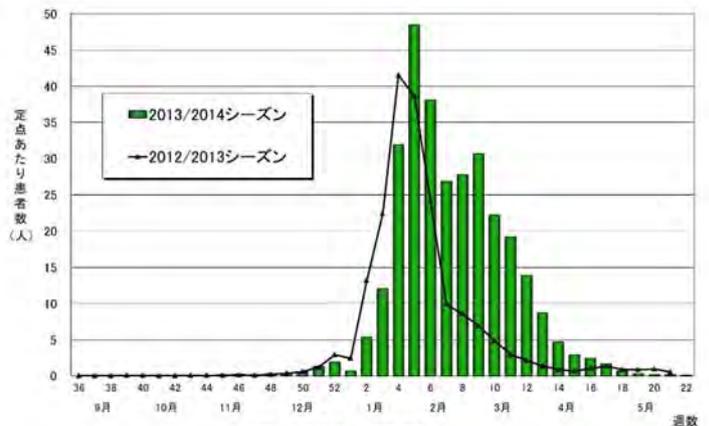


図1 定点あたり患者数

【病原体定点ウイルス調査】

病原体定点ウイルス調査においては607件を検査し、山形系統のB型ウイルス86件、AH1pdm09ウイルス46件、ビクトリア系統のB型ウイルス29件(AH1pdm09ウイルスの重複1件含む)、AH3型ウイルス17件が分離・検出されました。今シーズンは10月第41週に鶴見区の定点からビクトリア系統のB型ウイルスがはじめて分離され、翌第42週には港北区の定点からAH3型ウイルスが分離されました。また、第44週には瀬谷区の定点から山形系統のB型ウイルスが、第51週には磯子区の定点からAH1pdm09ウイルスが分離され、混合流行が予測されました。その後、1月に入ってからAH1pdm09ウイルスが増え始め、1月第5週をピークに3月

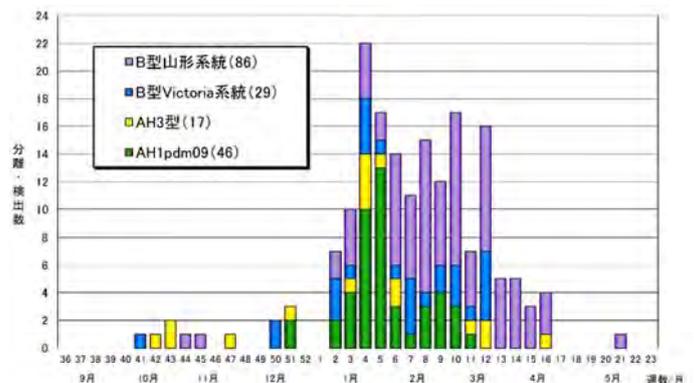


図2 病原体定点ウイルス分離・検出状況

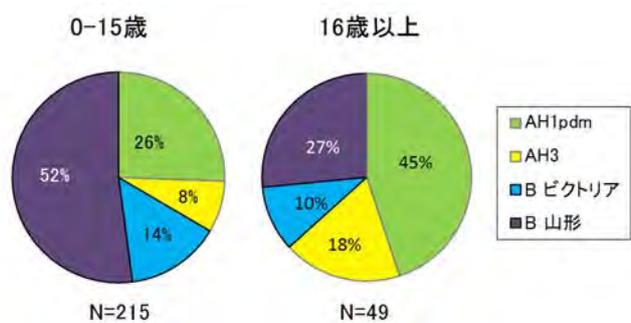


図3 年齢別分離・検出数の割合

第11週まで分離・検出されました。B型ウイルスは山形系統のウイルスが優勢でしたが、両系統のウイルスが混在したまま、3月第10週と第12週にピークとなり、5月第21週まで分離・検出されました。AH3型ウイルスは散発で分離されたのみでした(図2)。全調査の年齢別分離・検出数をみると、0歳から15歳ではB型ウイルスが66%を占め、16歳以上ではAH1pdm09ウイルスが45%を占め、年齢層により違いがみられました(図3)。

【集団かぜ調査】

集団かぜ調査では、2013年12月11日第50週(12月16日からの週)に戸塚区の小学校から、翌12日に南区の小学校から報告があり、前者はAH1pdm09ウイルスが、後者はビクトリア系統のB型ウイルスが分離・検出されました。その後、流行期に入った2014年1月第3週に7集団、第4週に8集団の発生がみられピークを示し、終息までの発生数は18区747施設887学級でした。検査依頼のあった19施設68人についてウイルス学的調査を実施し、山形系統のB型ウイルス38件、AH1pdm09ウイルス15件、ビクトリア系統のB型ウイルス7件、AH3型ウイルス5件を分離・検出しました(表1)。

【入院サーベイランス】

流行期に入った12月下旬からAH1pdm09ウイルスによる入院例が増加し、22件のインフルエンザウイルスが分離・検出されました(AH1pdm09ウイルス16件、AH3型ウイルス3件、山形系統のB型ウイルス3件)。このうち、重症例は、肺炎8件(AH1pdm09ウイルス6件と山形系統のB型ウイルス2件)、脳症3件(AH1pdm09ウイルス2件とAH3型ウイルス1件)、意識障害2件(AH1pdm09ウイルス)でした。

表1 集団かぜ調査結果

発生年月日	週	区	施設	検体数	分離・検出数	AH1pdm	B(山形)	B(ビクトリア)	AH3
2013. 12.11	第50週	戸塚	小学校	4	4	4			
12.12	第50週	南	小学校	3	2			2	
2014. 1. 9	第2週	栄	高齢者施設	1	1				1
1.14	第3週	青葉	保育園	3	2		2		
1.14	第3週	港南	中学校	4	4	1	3		
1.15	第3週	鶴見	小学校	4	4	4			
1.15	第3週	旭	中学校	5	5		5		
1.16	第3週	緑	幼稚園	5	4		4		
1.16	第3週	泉	保育園	3	3			3	
1.20	第3週	西	保育園	2	2	2			
1.21	第4週	金沢	中学校	3	3				3
1.21	第4週	中	小学校	5	5		3	2	
1.22	第4週	磯子	小学校	4	4		4		
1.22	第4週	保土ヶ谷	小学校	5	5		5		
1.22	第4週	都筑	小学校	3	3		2		1
1.22	第4週	瀬谷	中学校	2	2		2		
1.22	第4週	港北	小学校	3	3	1	2		
1.23	第4週	神奈川	小学校	5	5	3	2 ¹⁾		
1.30	第5週	栄	幼稚園	4	4		4		
合計		18区		68件	65件	15件	38件	7件	5件

1) B型(山形系統)とA型N2遺伝子の重複1件

表2 インフルエンザウイルス分離および遺伝子検査結果

各調査項目	検体数	インフルエンザ陽性数	AH1pdm09	AH3型	B型(山形)	B型(ビクトリア)
病原体定点等調査	607	178 ¹⁾	46	17	86	29
集団かぜ調査	68	65 ²⁾	15	5	38	7
入院サーベイランス	81	22	16	3	3	0
その他依頼検査	25	0	0	0	0	0
合計	781	265	77	25	127	36

1) B型(ビクトリア系統)とAH1pdmウイルスの重複1件、B型(山形系統)とアデノウイルス2型の重複1件、B型(ビクトリア系統)とアデノウイルス3型、ヒトコロナウイルス遺伝子との重複1件を含む

2) B型(山形系統)とA型N2遺伝子の重複1件を含む

各調査期間の検査合計は781件で、AH1pdm09ウイルス77件、AH3型ウイルス25件、山形系統のB型ウイルス127件、ビクトリア系統のB型ウイルス36件が分離・検出されました(表2)。

【分離株の抗原性】

昨シーズンから、ワクチン株の抗血清がこれまでのフェレット感染血清からウサギ免疫血清に変更になったため、HI価の差で類似性を正確に比較することができなくなりました。図4の抗原性状は参考値です。AH1pdm09ウイルスはワクチン株であるA/カリフォルニア/07/2009と同等または2倍差でした。AH3型ウイルスは25株中24株がワクチン株であるA/テキサス/50/2012と4倍差以内でした。B型ウイルスのうち、ビクトリア系統のウイルスはレファレンス株であるB/ブリスベン/60/2008と同等または2倍差でした。山形系統のウイルスはワクチン株であるB/マサチューセッツ/02/2012とすべて4倍以内の反応性を示しました。なお、国立感染症研究所で解析した横浜株はAH1pdm09ウイルス10株、AH3型7株、山形系統のB型9株、ビクトリア系統のB型6株で、AH1pdm09ウイルスとAH3型および山形系統のB型ウイルスはワクチン株と、同等または2倍差でした。ビクトリア系統のB型ウイルスは2011/2012シーズンのワクチン株であるB/ブリスベン/60/2008と同等な抗原性状でした。

【分離株の系統樹解析】

抗原性に関与するHA遺伝子についてPCRで増幅後、ダイレクトシーケンス法により塩基配列を決定し、Neighbor-joining法により系統解析を行いました。

AH1pdm09ウイルスについては昨シーズン分離株のクレード7とは異なり、D97N、K283E、E499Kのアミノ酸置換が共通のクレード6に含まれ、さらにK163QおよびA256Tが置換したグループでした(図5a)。NA遺伝子では、9月にフィリピン輸入事例で分離した株からN200Sのアミノ酸が置換しており、さらにI34V、I321V、K432E、N386K、L40Iのアミノ酸置換したウイルスが多くを占めました。また、2013年11月から札幌市を中心に地域流行していたH275Y耐性株¹⁾は、中国株と近縁なグループに含まれました(図5b)。

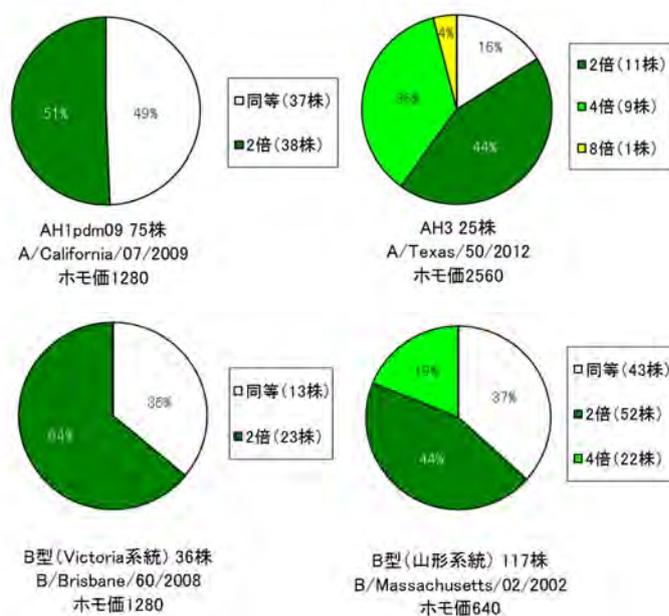


図4 2013/2014シーズン分離株のワクチン株等に対するHI価

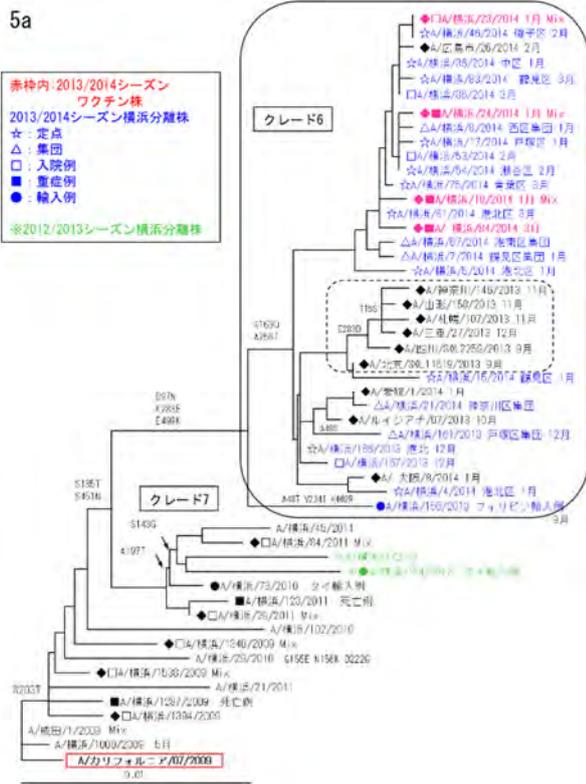


図5a AH1pdm09ウイルスのHA系統樹

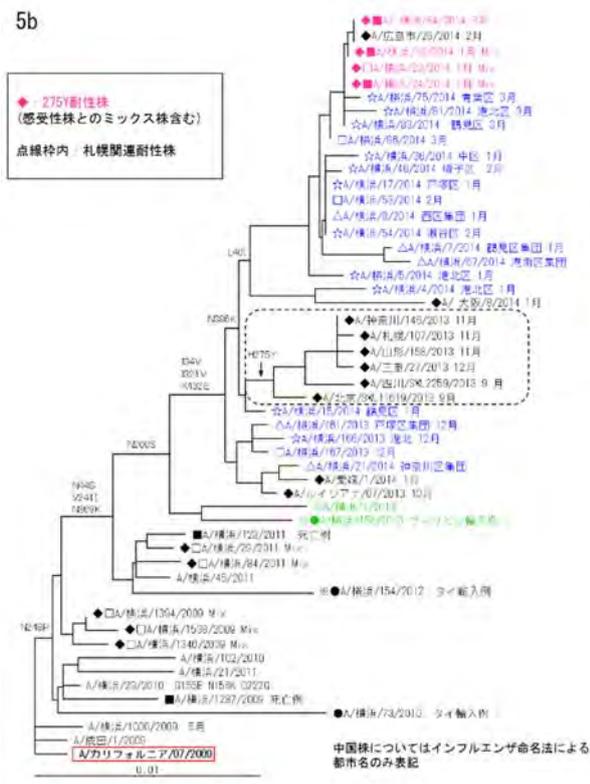


図5b AH1pdm09ウイルスのNA系統樹

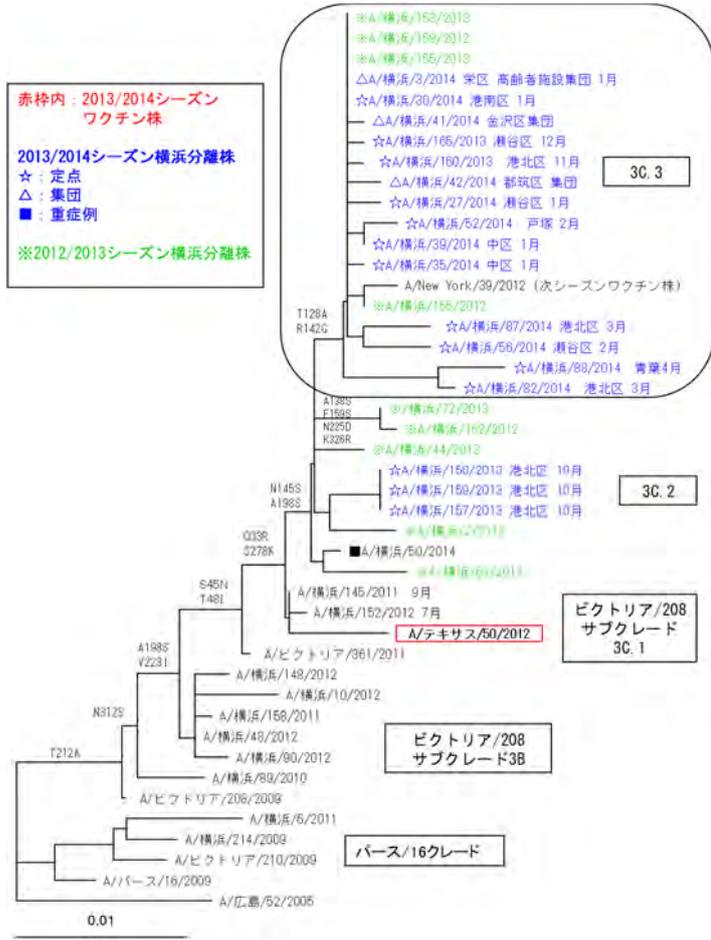


図6 A3型ウイルスのHA系統樹

AH3型ウイルスについてはワクチン株のA/テキサス/50/2012を含むサブクレード3Cに含まれ、さらにT128AおよびR142Gにアミノ酸置換したサブクレード3C.3グループが多くを占めました(図6)。B型ウイルスのうちビクトリア系統の分離株はレファレンス株のB/ブリスベン/60/2008と同じクレード1Aに含まれ、さらにK209Nのアミノ酸置換がみられました。山形系統のウイルスは昨シーズンのワクチン株B/ウィスコンシン/1/2010を含むクレード3と今シーズンワクチン株B/マサチューセッツ/02/2012を含むクレード2に分かれました(図7a)。NA遺伝子では、ビクトリア系統のウイルス3株で、76番目のアミノ酸にロイシン(L)が挿入された株が分離されました。また、抗原解析ならびにHA遺伝子解析で山形系統のクレード3のB型ウイルスであり、NA遺伝子がビクトリア系統であったリアソータント株が2株分離されました(図7b)。

【抗インフルエンザ薬感受性サーベイランス】

全調査で分離したAH1pdm09ウイルス77株、AH3型ウイルス25株、B型ウイルス154株について既知の薬剤耐性マーカーを検索しました。入院サーベイランスで分離したAH1pdmウイルス4株にH275Y変異(うち3株はミックス株)がみられました。国立感染症研究所の薬剤感受性試験の結果、AH1pdmウイルス3株はオセルタミビルとペ

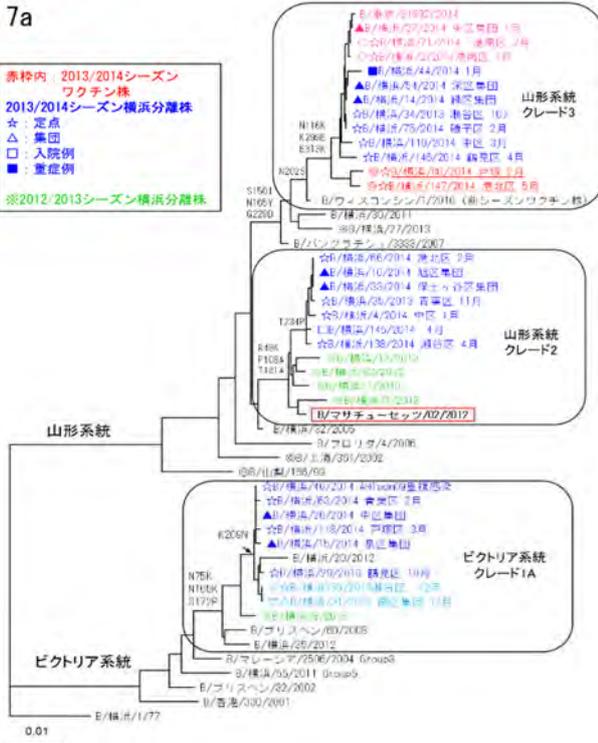


図7a B型ウイルスのHA系統樹

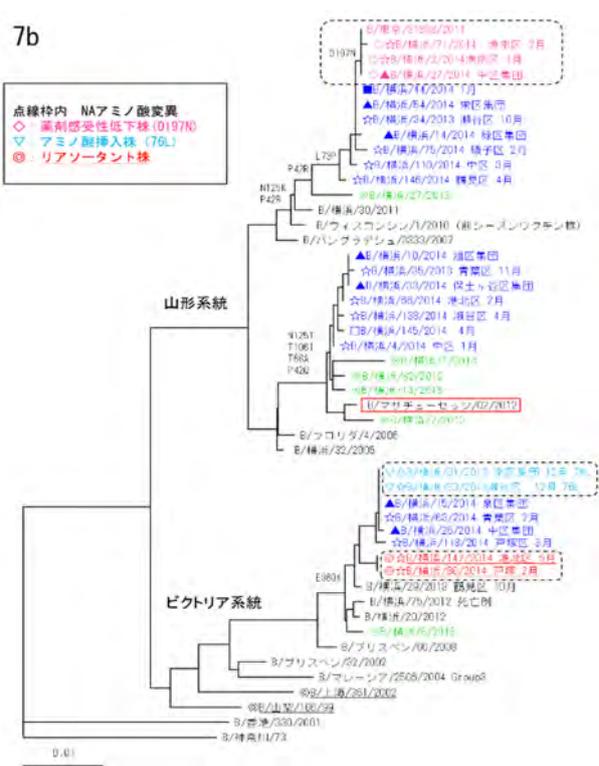


図7b B型ウイルスのNA系統樹

ラミビルに対しIC₅₀値 (NA酵素活性を50%阻害するのに必要な薬剤濃度)の低下がみられましたが、ザナミビル、ラニナミビルに対しては感受性を保持していました。B型ウイルスでは、山形系統のウイルスでD197N変異株が5株分離されました。薬剤感受性試験の結果、薬剤感受性株と比べてIC₅₀値が基準値以下であり、耐性株とは判定されませんでした。4剤すべての薬剤に対して感受性の低下がみられました。

【おわりに】

AH1pm09ウイルスによる流行は2010/2011シーズン以来3シーズンぶりであり、横浜市においても12月下旬より分離・検出数が増えました。急速に状態が悪くなる重症例も多く、2009/2010シーズンのパンデミック流行時と類似していました。今後も免疫を十分に持たない方は注意が必要です。B型ウイルスは山形系統(77.9%)とビクトリア系統(22.1%)の混合流行で、山形系統のB型ウイルスが優勢でした。リアソータント株やアミノ酸挿入株、薬剤感受性低下株等、来シーズン以降の動向が注視されます。AH3型ウイルスは小規模な流行でしたが、世界的には東ヨーロッパ(ドイツ、アイルランド、ルクセンブルグ)やスペイン等、AH3型ウイルスが優勢であった国も多くみられており²⁾、来シーズンも継続して監視が必要です。

参考資料

1. 国立感染症研究所. <速報>2013/14シーズンに札幌市で検出された抗インフルエンザ薬耐性A (H1N1) pdm09ウイルス.病原微生物検出情報 2014;35:42-43. <http://www.nih.go.jp/niid/ja/flu-m/flu-iasrs/4232-pr4081.html>
2. WHO. Review of the 2013-2014 winter influenza season, northern hemisphere. Weekly Epidemiological Record 2014;89: 245-256. <http://www.who.int/wer/2014/wer8923.pdf>

【 検査研究課 微生物部門ウイルス担当 感染症・疫学情報課 】

感染症発生動向調査委員会報告 7月

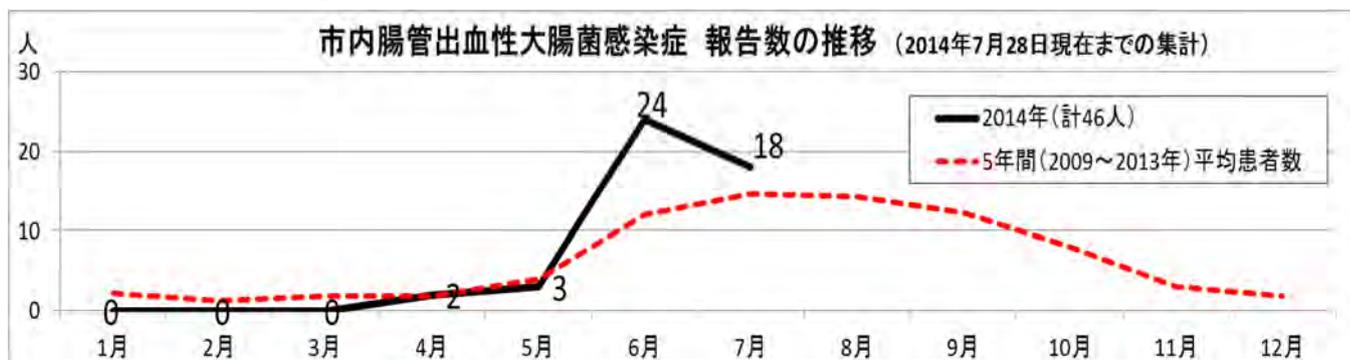
《今月のトピックス》

- 腸管出血性大腸菌感染症の報告が増えています。
- 伝染性紅斑が流行しています。
- ヘルパンギーナが流行しています。

全数把握疾患 7月期に報告された全数把握疾患

腸管出血性大腸菌感染症	18件	侵襲性髄膜炎菌感染症	1件
レジオネラ症	6件	侵襲性肺炎球菌感染症	2件
アメーバ赤痢	6件	梅毒	2件
後天性免疫不全症候群(HIV感染症を含む)	4件	風しん	1件
侵襲性インフルエンザ菌感染症	1件		

＜腸管出血性大腸菌感染症＞計18件（O157VT1VT2 10件、O157VT1 1件、O157VT2 3件、O157VT型不明1件、O111VT1VT2 2件、O121VT2 1件）の報告がありました。原因については現在調査中ですが、いくつかの事例では家族内での2次感染が見られています。本症の今年の報告数は、6月は過去5年間の平均を上回り、7月も7月28日現在の集計時点で上回っています。過去5年間の推移によると、8月から9月にかけても報告数が多いことが考えられ注意が必要です。特に抵抗力の弱い乳幼児や高齢者で重症化することがあります。家庭内での2次感染予防には手洗いが重要です。さらに、下痢症状がある人は専用のタオルを使うなど、他の人と使うタオルを別にしましょう。トイレは常に清潔に掃除し、ドアノブ・水洗レバー・電気のスイッチなど手の触れるところは、特に念入りにきれいにしましょう。全国的には毎年保育施設における集団発生が多くみられており、オムツ交換時の手洗い、園児に対する排便後・食事前の手洗い指導の徹底が重要です。また、簡易プールなどの衛生管理にも注意を払う必要があります。さらに、過去には動物とのふれあい体験での感染と推定される事例も報告されており、動物との接触後の十分な手洗いや消毒も重要です。



＜レジオネラ症＞肺炎型6件の報告があり、現在感染経路等調査中です。

＜アメーバ赤痢＞腸管アメーバ症6件（経口感染2件、同性間性的接触による感染1件、異性間性的接触による感染1件、感染経路等不明2件）の報告がありました。

＜後天性免疫不全症候群(HIV感染症を含む)＞AIDS3件、無症状病原体保有者1件の報告がありました。そのうち、異性間性的接触による感染が3件、同性間性的接触による感染が1件でした。

＜侵襲性インフルエンザ菌感染症＞90歳代の報告が1件ありました。

＜侵襲性髄膜炎菌感染症＞70歳代の報告が1件ありました。患者は集団生活はしておらず、周囲に他の患者は確認されませんでした。

＜侵襲性肺炎球菌感染症＞70歳代の報告が2件あり、いずれも予防接種歴は不明でした。

＜梅毒＞無症候期の報告が2件あり、1件は同性間性的接触による感染が推定され、もう1件は感染経路等不明でした。

＜風しん＞30歳代女性の検査診断例の報告が1件あり、予防接種歴は不明でした。

定点把握疾患 平成26年6月23日から平成26年7月27日まで

(平成26年第26週から平成26年第30週まで。ただし、性感染症については平成26年6月分)の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

平成26年 週一月日対照表

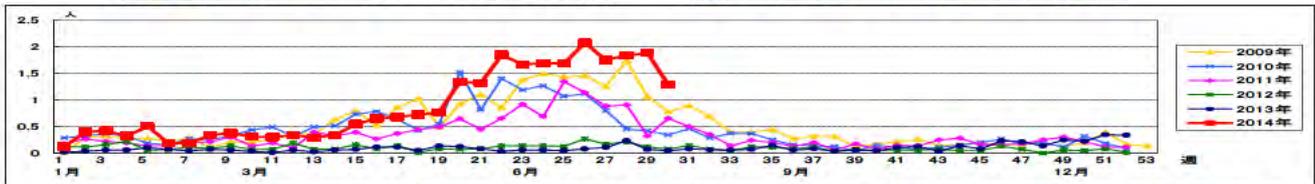
第26週	6月23日～6月29日
第27週	6月30日～7月 6日
第28週	7月 7日～7月13日
第29週	7月14日～7月20日
第30週	7月21日～7月27日

1 患者定点からの情報

市内の患者定点は、小児科定点:92か所、内科定点:60か所、眼科定点:19か所、性感染症定点:27か所、基幹(病院)定点:4か所の計202か所です。なお、小児科定点は、インフルエンザと小児の11感染症を報告します。内科定点はインフルエンザのみを報告します。従ってインフルエンザは、小児科と内科で、計152定点から報告されます。

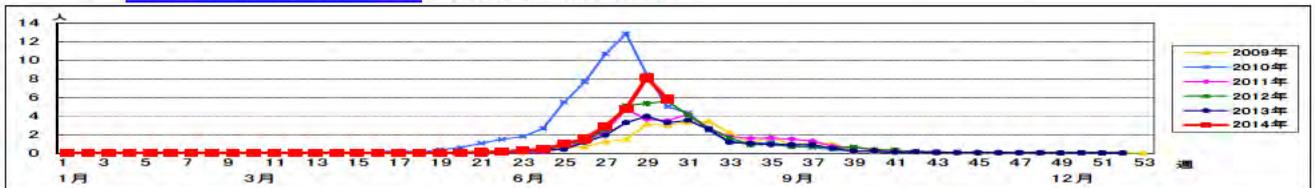
<伝染性紅斑>第26週に市全体で定点あたり2.08と警報発令基準値(2.00)を上回って以降、警報レベル(警報解除基準値1.00)が継続しています。ただ、第30週は1.29と減少傾向に転じました。区別では9区で警報レベルとなっています。

◆[伝染性紅斑について](#)(国立感染症研究所) ◆[横浜市感染症臨時情報:伝染性紅斑](#)

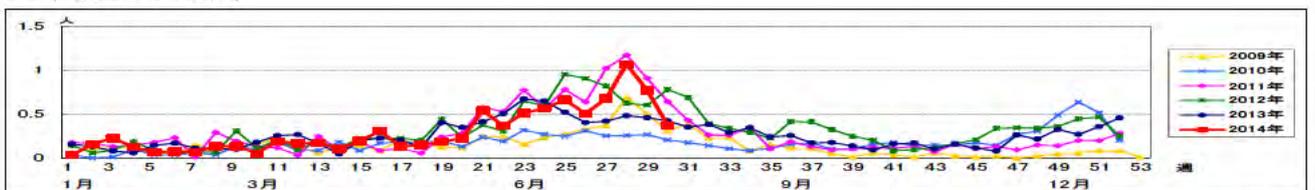


<ヘルパンギーナ>第27週から急激に報告が増加し、第29週は8.10と警報発令基準値(6.00)を上回りました。第30週は5.81と減少に転じましたが、警報レベル(警報解除基準値2.00)が継続しています。区別では10区で警報レベルとなっています。感染予防では、患者との密接な接触を避け、流行時にうがいや手洗いをしっかりと行うことが重要です。特に患児のおむつを替えた後などは、よく手を洗いましょう。

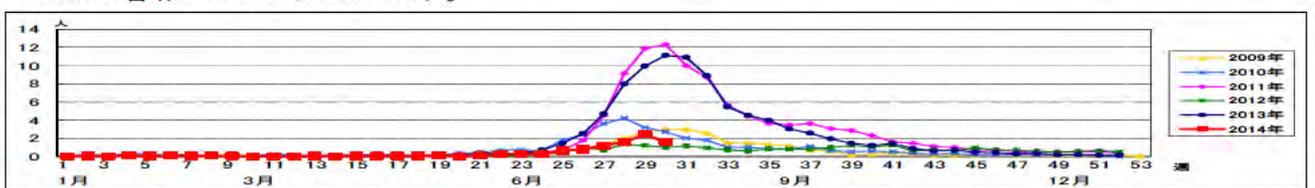
◆[ヘルパンギーナについて](#)(横浜市衛生研究所)



<咽頭結膜熱>第30週は市全体で定点あたり0.37と減少しましたが、保土ヶ谷区1.20で警報レベルが継続しています。



<手足口病>第30週は市全体で定点あたり1.62と、前週から減少しました。ただ、磯子区8.75、港南区4.40で警報レベルとなっています。



<性感染症>6月は、性器クラミジア感染症は男性が21件、女性が15件でした。性器ヘルペス感染症は男性が8件、女性が6件です。尖圭コンジローマは男性4件、女性が1件でした。淋菌感染症は男性が20件、女性が0件でした。

<基幹定点週報>マイコプラズマ肺炎は第26週0.75、第27週0.00、第28週0.33、第29週0.00、第30週0.00と落ち着いています。感染性胃腸炎(ロタウイルス)は第26週0.50以降、第30週まで報告はありません。クラミジア肺炎、細菌性髄膜炎、無菌性髄膜炎の報告はありませんでした。

<基幹定点月報>6月はメチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症4件、薬剤耐性緑膿菌感染症1件、薬剤耐性アシネトバクター感染症1件の報告がありました。ペニシリン耐性肺炎球菌感染症の報告はありませんでした。

2 病原体定点からの情報

市内の病原体定点は、小児科定点:8か所、インフルエンザ(内科)定点:3か所、眼科定点:1か所、基幹(病院)定点:4か所の計16か所を設定しています。

検体採取は、小児科定点とインフルエンザ定点では定期的に行っており、小児科定点は9か所を2グループに分けて毎週1グループで実施しています。また、インフルエンザ定点では特に冬季のインフルエンザ流行時に実施しています。

眼科と基幹定点では、検体採取は対象疾患の患者から検体を採取できたときのみ行っています。

<ウイルス検査>

7月に病原体定点から搬入された検体は、小児科定点37件、基幹定点13件で、眼科定点4件、定点外医療機関からは5件でした。

8月8日現在、表に示した各種ウイルスの分離株7件と遺伝子検査42件が同定されています。

表 感染症発生動向調査におけるウイルス検査結果(7月)

主な臨床症状 または診断名 分離・検出ウイルス	上 気 道 炎	下 気 道 炎	R S 感 染 症	胃 腸 炎	手 足 口 病	ヘル ペ シ ン ギ ー ナ	血 球 貧 食 症 候 群	熱 性 け い れ ん	耳 下 腺 炎	不 明 熱	発 疹 症	流 行 性 角 結 膜 炎
アデノ NT*												1
アデノ 1型	1											
アデノ 2型											1	
パラインフルエンザ 1型	1											
パラインフルエンザ 3型	5	3	1						1			
R S			1									
ヒトメタニューモ		2										
ヒトパルボ B19											1	
ライノ	3	2										
コクサッキー A 2型						1						
コクサッキー A 4型	4					5				1		
コクサッキー A 5型		1			1	2			1			
コクサッキー A 9型								1				
コクサッキー A10型						2						
エコー 11型				1								
パレコ 1型				2		1						
パレコ 3型							1			1		
合計	1 13	0 8	0 2	2 1	0 1	1 10	1 1	0 1	0 2	0 2	1 1	1 0

上段:ウイルス分離数/下段:遺伝子検出数

*:未同定

【 検査研究課 ウイルス担当 】

<細菌検査>

7月の感染性胃腸炎関係の受付は小児科定点から1件、基幹定点から10件、その他が31件で、腸管病原性大腸菌(O63:H6)、腸管毒素原性大腸菌(O6:H16)、腸管出血性大腸菌(O157:H7、O157:H-、O121:H6、O145:H-、O26:H11、O111:H-)、サルモネラ(*S.Chester*)、*Campylobacter jejuni* が検出されました。その他の感染症は小児科から3件、基幹定点から3件、その他が18件でした。

表 感染症発生動向調査における細菌検査結果(7月)

感染性胃腸炎

検査年月 定点の区別 件数	7月			2014年1月～7月		
	小児科	基幹	その他*	小児科	基幹	その他*
菌種名						
赤痢菌						1
腸管病原性大腸菌		1			1	
腸管出血性大腸菌			29		1	41
腸管毒素原性大腸菌		1			2	
サルモネラ			1		25	4
カンピロバクター	1			1		1
NAGビブリオ						1
不検出	0	8	1	2	35	15

その他の感染症

検査年月 定点の区別 件数	7月			2014年1月～7月		
	小児科	基幹	その他*	小児科	基幹	その他*
菌種名						
A群溶血性レンサ球菌						
T1	1			2		2
T4	2			6		
T6				6		
T11				1		
T12				6		
T B3264				2		
型別不能				3		1
B群溶血性レンサ球菌			5			17
D群溶血性レンサ球菌						2
G群溶血性レンサ球菌						3
メチシリン耐性黄色ブドウ球菌		2			12	1
<i>Legionella pneumophila</i>			2			6
インフルエンザ菌			1			5
肺炎球菌			3	1		63
<i>Neisseria meningitidis</i>			1			1
結核菌						4
百日咳					1	
その他		1	1		9	3
不検出	0	0	5	3	1	25

*: 定点以外医療機関等(届出疾病の検査依頼)

T(T型別): A群溶血性レンサ球菌の菌体表面のトリプシン耐性T蛋白を用いた型別方法

【 検査研究課 細菌担当 】

衛生研究所WEBページ情報

横浜市衛生研究所ホームページ(衛生研究所WEBページ)は、平成10年3月に開設され、感染症情報、保健情報、食品衛生情報、生活環境衛生情報等を提供しています。

今回は、平成26年7月のアクセス件数、アクセス順位、電子メールによる問い合わせ、WEB追加・更新記事について報告します。

なお、アクセス件数については市民局広報課から提供されたデータを基に集計しました。

1 利用状況

(1) アクセス件数 (平成26年7月)

平成26年7月の総アクセス数は、150,692件でした。主な内訳は、感染症情報センター66.2%、食品衛生5.2%、保健情報9.1%、検査情報月報5.6%、生活環境衛生2.7%、薬事0.9%でした。

(2) アクセス順位 (平成26年7月)

7月のアクセス順位(表1)

表1 平成26年7月 アクセス順位

は、第1位が「クロストリジウム-ディフィシル感染症について」、第2位が「B群レンサ球菌(GBS)感染症について」、第3位が「サイトメガロウイルス感染症について」でした。

順位	タイトル	件数
1	クロストリジウム-ディフィシル感染症について	7,228
2	B群レンサ球菌(GBS)感染症について	3,953
3	サイトメガロウイルス感染症について	2,980
4	衛生研究所トップページ	2,849
5	EBウイルスと伝染性単核症について	2,626
6	サルモネラ感染症(食中毒)について	2,497
7	エンテロウイルスについて	2,371
8	ぎょう虫(蟯虫)症について	2,269
9	リステリア症について	2,073
10	調査研究・試験検査機関のあり方に関する報告書	1,864

データ提供: 市民局広報課

7月の総アクセス数は、前月に比べ11%ほど増加しました。今月の1位は、「クロストリジウム-ディフィシル感染症について」でした。クロストリジウム-ディフィシル

感染症は、老人や免疫機能が低下している人たちに多く発生します。2位には「B群レンサ球菌(GBS)感染症について」が入っています。また、7位に「エンテロウイルスについて」が入りました。エンテロウイルスは夏から秋にかけて多く発生します。こどもの夏のカゼの代表としてよくあげられる[手足口病](#)や[ヘルパンギーナ](#)を起こすウイルスは、エンテロウイルスに属します。

「クロストリジウム-ディフィシル感染症について」に関連する情報

<http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/idsc/disease/clostridium1.html>

「B群レンサ球菌(GBS)感染症について」に関連する情報

<http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/idsc/disease/gbs1.html>

「サイトメガロウイルス感染症について」に関連する情報

<http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/idsc/disease/cytomegalol.html>

(3) 電子メールによる問い合わせ（平成26年7月）

平成26年7月の問い合わせは、3件でした(表2)。

表2 平成26年7月 電子メールによる問い合わせ

内容	件数	回答部署
ヒトパレコウイルスの診断について	1	感染症・疫学情報課
ヒトパレコウイルスの診断について	1	検査研究課ウイルス担当が回答案作成し、 感疫課から回答
ペスト予防について	1	感染症・疫学情報課

2 追加・更新記事（平成26年7月）

平成26年7月に追加・更新した主な記事は、8件でした(表3)。

表3 平成26年7月 追加・更新記事

掲載月日	内容	備考
7月 1日	感染症に気をつけよう(7月号)	掲載
7月 7日	ソマリアのこどもの定期予防接種について	掲載
7月10日	◆パンフレット◆ 腸管出血性大腸菌感染症 O157に注意しましょう！	更新
7月10日	腸管出血性大腸菌感染症の発生状況	掲載
7月10日	平成26年 熱中症情報	掲載
7月10日	平成26年 熱中症情報	更新
7月18日	エチオピアのこどもの定期予防接種について	掲載
7月26日	◆お知らせ◆ 感染症法が一部改正 【 届出基準・届出様式 】	変更

【感染症・疫学情報課】